

俳句からスペイン語落語への“見果てぬ夢”



スペインのマラガ大学に留学時代(定年後)に、マルベリャに住むドイツ人Vさんを訪ねました。プールつきの大邸宅に住む氏は“遠路ようこそ”と、昼食に典型的なスペイン料理パエリアを用意してくれました。

テラスにあるテーブルへ。日中のコスタ・デル・ソルは暑い。外側に水滴を帯びたコップの水がいかにも冷たそう。海老をはじめ魚介類がふんだんに入ったパエリアのおいしそうな香りが漂ってきます。「ケ・アプロベチェ(どうぞ召し上がれ)」

Vさんのすすめにフォークを握りかけた私はふと、戸惑ってしまいました。

「……」

「いただきます」と言おうとしたのですが、言葉が出てきません。正確に言うと、「いただきます」に該当するスペイン語がないのです。とはいえ、黙って食べ始めるわけにもいかない。そこで、私はどんな場面にも通ずる無難な言葉でその場を乗り越えたのです。

「グラスias(ありがとうございます)」

プールサイドでは、金髪の幼い女の子たちがキャッキョと叫びながら遊んでいます。さんさんと地中海の太陽が降り注ぐパティオでフォークを口に運びながら、私はふと考えてしまいました。前日に日本人の俳句愛好会から参加を呼びかけられていたからです。でも、いざ句を詠むだんになって、光と影のコントラストの強いこのスペインで、果たして日本的な俳句の情感が出てくるだろうかと…。

打ち水からくる涼感、水墨の山水画などは、いかにも日本の“湿りの文化”を象徴しています。

「古池や かわずとびこむ 水の音」



この芭蕉の名句や短歌などに見られる「ワビ」とか「サビ」あるいは「幽玄」といった感覚は、そうした自然環境にいてこそわかるような気がするからです。ががとしたアンデスの峰々、アマゾンの大密林、パンパの大草原、メキシコのサボテン地帯と、広大で荒々しいラテン・アメリカの大自然に比べると、日本の自然はしっとりとした箱庭的な美しさに映ります。

フルーツが出て、食後のコーヒーも終わりました。「ごちそうさま」にピタリなスペイン語がなく、私は再びお礼の言葉にひとこと加えて言ったのです。

「グラスias(ありがとうございました)」「エラ ムイ プエノ(大変おいしかったです)」

このように、一つの言語また文化を知るためには、言葉や文化の出でくる自然環境や慣習の違いを知ることが大切になってきます。

ところで、外国でよく知られた日本の文化といえば、先の俳句のほかに伝統の歌舞伎、そして現代ではアニメにカラオケでしょうか。日本の自動車、電気製品などモノの輸出は伸張しているのに対し、文化は大幅な入超です。

一般に、政治次元の交流は力の関係に支配され、経済の交流は損得が基準で、状況が変わればすぐに企業の撤退も起きてきます。それに比べて文化の交流は、お互いの国民の理解を深め、友好を永續させていく力になるものです。その意味で、私は「日本は文化の輸出にもっと力を入れるべき」と考えています。



その自論の万分の一の実践にでもなればと、私は俳句に加えて、今年から英語落語の勉強も始めました。どこの国のどんな人でも、面白いユーモアのある話は好きだからです。この秋、地元の国際交流の集いで初めて古典落語から「皿屋敷」と「天狗裁き」を英語で披露したところ、在住の外国人からも大うけでした。

「よし、今度はスペイン語でも!。いつかはあこがれのメキシコの舞台で、なんてドン・キホーテの“見果てぬ夢”は途方もなく広がっていくのであります…」

